

タイトル名「対人援助実践をレポートするこの一冊」

第27回：第3章-その12-

## Only the Clients know what they are looking for

著：渡辺修宏

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

### Here is my secret.

It is very simple.

we do not see clearly, except when we look with our heart.

The things that are most important cannot be seen with our eyes.

(意識：ぼくの秘密を教えてあげるよ。とても簡単なことなんだ。

ぼくたちは、こころの目で見ない限り、なにもはっきり見えないんだ。

一番大切なものは目に見えないんだよ)

(最後の文のフランス語：Le plus important est invisible)

繰り返しになるが、前回ご紹介させていただいた、サン・テグジュペリ作「星の王子様」に登場する一節を、上に記した。

幼い頃から何度か目にしてきたこのセリフが、数十年を経て、今あらためて私自身の内側にある琴線に触れる。

思えば今日まで、身体や知的、あるいは精神になんらかの障害をわずらう方や難病患者を主な対象として、私は、いわゆる援助実践にいくばくか関わってきた。それなりの年月を費やしてきた。

その中で、時々、被援助者のことをろくに知りもしないのに、わかったような気になる自分に気づくこともあった。「こうやればいいんだ」とか、「このようなかかわりでいいのだ」と、あたかも、援助に精通している専門家のように振る舞ったこともあった気がする。

そして同時に、「本当にそれでいいのか」と、自分自身を疑うこともあった。なんなら、「俺はこの仕事に向いていない」と、なにやら落ち込むこともあった。そして、「対人援助ってなんなんだ」とわからなくなり、真剣に悩むことが、指の数では足りなくらいあった。

悩みすぎて…、やる気をなくして、…考えたり感じることを忘れて、惰性的に業務にあ

たったこともある。まったくもって、お恥ずかしい告白である。

そんなどん底に陥った時に、そこからの脱出のヒントになったのは、まさに「星の王子様」がいう、「心の目でみてごらん」というフレーズだった。

目で見て、耳で聞いてとらえる世界だけが全てじゃない。目や耳を通して得られたなにかだけで、すべて理解した気になっては、どん底から這いあがることはできない。一度、目を閉じて、耳をふさぐ必要がある。そして、まさに「心」を働かせることによってとらえられる、気付ける世界があるのである。それは、自分の限界を打破するような感覚に近いのかもしれない。

### 目や耳を超えて

そういえば、「星の王子様」が言わんとするこの指摘というのは、実はなにも目新しいことではないことに気づく。例えば、以下のような表現も、同様の内容といっても特段問題ないのではないかと思う。

「肉眼ほど当てにならないものはない。見ようとすればするほど余計なものを  
見てしまう。ものは胸で見ろ、目で見ろな。」(能の教え)

「目で見ないで叡智を見ろ」(ロダン)

「私は肉眼を信じない。私が持っているのは、もっと立派な、もっと確実な眼光で  
あって、それによって私は真と偽を区別することができる。」(セネカ)

これらの内容は、志村史夫(2014)の「一流の研究者に求められる資質」(牧野出版)の42-43ページに登場している。なるほど、やっぱりこのような感覚というはとても大事だと気付かされる。

さて、「星の王子様」にはそのほか、**Only the Children know what they are looking for** というセリフが登場する。「なにを探しているかは子どもたちだけがわかっている」という意味である。この**Children**を**Client**に変えて、本稿のタイトルとした。そう、**Only the Clients know what they are looking for**。

どんなに勉強しても、経験を積んでも、その援助対象者を「わかったつもり」になって、過信、慢心、傲慢になってはいけない。わからないことはわからない。目に見えないものは目に見えない。

ただ、みつけようと、感じようと、触れようとするだけ。それだけが今の私にできることのすべて。

—つづく—